紀長谷雄「九月尽日惜残菊応製詩序」成立背景に関する再検討

Reconsideration of the Background of Ki no Haseo's "Kugatsujinjitsu zangiku wo oshimu ōsē shijo"

廖栄発

Abstract

This article conducts a reconsideration of the Background of Ki no Haseo's poem preface "Kugatsujinjitsu zangiku wo oshimu ōsē shijo". This Preface was created at a public banquet, which was an honor for Ki no Haseo. However, when composing this preface, he reused expressions from his previous works. Through the analysis in this article, it was revealed that he was not arbitrarily reusing his own expressions, but rather deliberately reusing the poem preface expressions from the seventh year of Gangyō and the first year of Kanpyō. Through such poetic method, at the public banquet of Kugatsujinjitsu in the second year of Engi, without the participants present at the scene noticing, he accomplished his private reminiscence to his poetry mate Sugawara no Michizane, who initiated the banquet of Kugatsujinjitsu. Such bold technique is extremely unique and rare both within Ki no Haseo's works and within the poem prefaces of public banquet in the Heian period.

Keywords

公宴、自作の再利用、私的追想、菅原道真、本朝文粋

Public Banquet, Reuse of own works, Private reminiscences, Sugawara no Michizane, *Honchomōnzui*

はじめに

紀長谷雄は、延喜二年(902)九月二十八日に、宮中の「九月尽日の宴」(1)(九月の末日に秋の終わりを惜しむ宴)に参加して、「九月尽日惜_残菊_応製詩序」という詩序を作った。この詩序は従来、「九月尽日の宴」の関係資料として扱われてきたが、詩序の成立背景にどのような事情があったのかは明らかにされていない。特に紀長谷雄の創作の歩みや平安朝の公宴詩序の成り立ちにおいて、いかなる文学史的位置づけが可能であるか、ほとんど検討されていない。従って本稿では、これらの問題の明確化と再検討を目指すことにしたい。

一、「延喜以後詩序」から見る「九月尽日惜残菊応製詩序」

まず、紀長谷雄の創作史における当該詩序の価値について検討したい。

(1) 「九月尽日の宴」は、文字通り九月が尽きる日、つまり九月末日(二十九日もしくは三十日)に行われるはずの宴だが、平安時代の開催例をみれば、当該詩宴の二十八日の例のほか、寛平六年の二十七日開催の例もある。「九月尽日の宴」の成立の経緯や意義などについては、太田郁子「『和漢朗詠集』の「三月尽」「九月尽」」(『言語と文芸』第91号、1981年3月)、北山円正著『平安朝の歳時と文学』(和泉書院、2018年)第一部の第1章「菅原氏と年中行事――寒食・八月十五夜・九月尽――」(初出2002年)と第4章「菅原道真と九月尽日の宴」(初出2003年)、周防朋子「平安朝文学にみられる「九月尽」詩について」(『甲南大学紀要 文学編』第138号、2004年)などを参照されたい。

（1） 延喜以後の創作態度転換の宣言

延喜二年のこの「九月尽日の宴」については、『日本紀略』延喜二年九月二十八日条の記録に「於二御殿一有二九月尽宴一、以三九月尽日惜二残菊一為レ題。左大臣以下陪レ座、奏二糸竹一」とあるように、醍醐天皇も左大臣藤原時平らの重臣も参加した格式高い公宴であることが分かる。まず押さえておきたいのは、長谷雄の当該詩序が、延喜年間以後の公宴での作品であるという事実だ。

そして、長谷雄の延喜年間以後の公宴での作品を考えるには、「延喜以後詩序」(『本朝文粋』巻八・201)[2]という彼の自伝ともいうべき作品を抜きにしては語れない。これは詩序ではなく、「書序」(書物の序文)である。最晩年、長谷雄(845～912年)は、延喜年間以来「独吟独作」してきた詩作をもとに『延喜以後詩巻』という書物を編み、この序文を書いて編纂の経緯を述べている。序文の中には延喜年間以後の公宴での作詩態度も語られているのである。

序文のおよそ四分の三ほどの内容において、長谷雄は詩人を目指して歩んできた軌跡を回顧している。それを読むと、師匠であり詩友でもあった菅原道真が長谷雄にとっていかに重要な存在であったかがよく分かる。ところが、道真は昌泰四年(901)の正月に大宰府に左遷される(同年七月には「延喜」に改元)。道真の左遷は、長谷雄の眼には詩道そのものの衰退を意味するものと映った。大宰府に流され、特に延喜三年(903)、道真が逝去した後の詩道の衰退ぶりについて、長谷雄は次のように痛嘆している。

> 在朝儒者、寔繁有徒。咸列王何之輩、不習潘謝之流。取捨不同、是非各異。彼豈為愛憎而然乎、誠不知文体之趣也。
>
> 朝(てう)に在る儒者、寔(まこと)に繁(ともがら)くして徒有り。咸(ことごと)く王何の輩に列なり、潘謝の流を習はず。取捨同じからず、是非各(おの)おの異なり。彼豈(あに)愛憎の為にして然(しか)らんや、誠に文体の趣を知らざるなり。

この段落の意味を解釈すると、次のようになるだろう。

朝廷には、たくさんの儒者はいるが、彼らは中国の王弼(『老子』『周易』の注釈を書いた)や何晏(『論語集解』を編集)のような碩儒に属しており、潘岳や謝霊運のような詩人ではないから、詩を学ぼうともしない。私は彼らと考え方(「取捨」)や価値観(「是非」)を同じくするものではない。彼らは、学問(儒学)を愛し重んじるがゆえに、詩を嫌い軽んじるのか。(いや)彼らは詩という体裁(ジャンル)の趣を知らないだけなのである。

一言でいえば、長谷雄はこの段落において、道真の左遷とそれに続く窮死の後、朝廷には詩友と呼ぶに相応しい人物はもういない、と訴えているのである。こうした状況の下、詩人の立場を堅持する長谷雄は次のような行動をとっている。

---

(2) 本稿の『本朝文粋』の本文および通し番号は、基本的に新日本古典文学大系『本朝文粋』(大曽根章介・金原理・後藤昭雄校注、岩波書店、1992年)に拠る。他本に拠る場合、その都度説明する。

司馬遷有言、「誰為為之、誰令聴之」。故予延喜以後、不好言詩、風月徒抛、煙華如棄。雖関公宴、不敢深思、只避格律之責而已。若夫覩物感生、随時思動、任志所之、不労摛藻、独吟独作、不肯視人。年往月来、徒成巻軸、題曰延喜以後詩巻。後之見者、莫咲不到佳境耳。

司馬遷言へること有り、「誰が為にかせん、誰にか聴かしめん」と。故に予延喜以後、詩を言ふことを好まず、風月徒らに抛て、煙華棄てたるが如し。公宴に関ると雖も、敢て深く思はず、只だ格律の責めを避らくのみ。若し夫れ物を覩て感生り、時に随ひて思ひ動くときんば、志の之く所に任せて、藻を摛ぶることを労せず、独り吟じ独り作し、人に視すことを肯んぜず。年往き月来りて、徒らに巻軸を成せり。題して『延喜以後詩巻』と曰ふ。後の見ん者、佳境に到らざることを咲ふこと莫からまくのみ。

まず、波線の「不労摛藻」について説明したい。従来の『本朝文粋』の校訂本では「不労」と「摛藻」との間に別の文章の本文が間違って混入していた。古写本の身延山久遠寺本『本朝文粋』等の「不労摛藻」という本文が正しいことは、拙稿「長谷雄の「詩言志」の宣言——「延喜以後詩序」を読み直す——」(3)で指摘した通りだ。なお、拙稿では当該段落に注目して、延喜年間以後の作詩態度の転換(「公」の領域よりも「私」の領域を重んずる)および詩風の転換(美文主義から平明なスタイルへ)を長谷雄が宣言していることについても述べたが、ここで改めて彼の延喜年間以後の公宴での創作姿勢の変化について確認しておきたい。

この段落で長谷雄は司馬遷の言葉を引用して、自分が詩を作ってもそれを聞かせ、分かち合える詩友がいないため、延喜年間以後、詩を作る気が失せてしまっていることをはっきりと語っている。そして、傍線部のように、出席が避けられない公宴に参加しても、深く詩思を凝らすことなく詩を作っており、韻律の正しさという最低限のルールを逸脱しなければそれでいいと述べる。つまり長谷雄は、詩友を失った延喜年間以後、公宴での作詩に対しては消極的な態度をとってきたと最晩年に告白しているわけだ。

だが、この告白は果たしてそのまま字句通り受け止められるのか。長谷雄の延喜年間以後の公宴作を改めて検討してみよう。

(2)延喜以後の公宴作

長谷雄の没年は延喜十二年である。詩友道真左遷の昌泰四年(七月に「延喜」に改元)から数えて十二年間、長谷雄は多くの公宴作を作っていたと思われるが、残念ながら伝存しているものは僅少である。

延喜二年の「九月尽日惜_残菊_応製詩序」のほか、長谷雄の延喜年間以後の詩作はわずか四つしか伝存していない。しかも、どの詩も摘句の形で、一首の詩として完全なものではない。以下の通りである。

(3) 『和漢比較文学』第56号、2016年2月

延喜三年作　「残雪伴寒梅」詩句（七言律詩の中間二聯。『類聚句題抄』168所収[4]）
延喜四年作　「花伴玉楼人」詩句（七言律詩の中間二聯。『類聚句題抄』163所収）
延喜十一年作　「霽色明遠空」詩句（七言排律の中間四聯。『類聚句題抄』28所収）
延喜十年または寛平初期作　「春風扇微和」詩句（七言律詩の頷聯か頸聯。『和漢兼作集』春部上所収）

この四つの詩作は、いずれも対句仕立ての部分であり、尾聯のような詩人の思いのたけが比較的に伝わりやすい述懐部分ではないために、これらの詩句だけを通して延喜以後の長谷雄の内面の機微を推察するのは極めて難しい。

よく見れば、「残雪伴寒梅」と「春風扇微和」の対句には、道真らの詩の表現を模倣したり、自作の焼き直しをしたりしている箇所も確かにある[5]。だが、そうした表現の再利用が長谷雄の公宴詩に対する消極的な作詩態度の現れであると結論づけることに、筆者は慎重である。なぜなら、詩は散文と違い、一つの言葉や表現が素晴らしいものと見なされ、特に詩語化されると、繰り返して詠われてゆくという事情があるからである。わずかな詩語の類似表現だけを頼りに、長谷雄の作詩態度を判断しては、早計の誹りを免れないだろう。

なお、『新撰朗詠集』（秋・九月尽・261）[6]に採録されている長谷雄の次の詩句は、延喜二年の九月尽日の公宴の作であろうと推測[7]されている。

那堪漸漸鐘声暮　　那か堪へむ　漸漸に鐘の声暮れぬることを
挑尽寒灯夜半花　　挑げ尽くせる寒灯は　夜半の花

『新撰朗詠集』では、この詩句の詩題表記は「九月尽」となっている。「九月尽日惜二残菊一応製詩序」という詩序名に見られる「惜二残菊一」という詠題に関わる記述がないため、延喜二年の詩作とするには証拠不十分だと思われる。別の「九月尽」の詩宴の作である可能性もあるかもしれない。

詩句の意味について、柳澤良一氏は「秋の最後の日、夕暮れの鐘の音が聞こえ、九月尽の日も次第に終わるのかと思うと、とても堪えられない。今、その芯をかきたて尽くし名残を惜しんでいる寂しげな灯火は、あたかも夜中に咲く残菊の花のようだ」（傍線 筆者）と訳し

(4)　『類聚句題抄』の通し番号は、本間洋一氏の『類聚句題抄全注釈』（和泉書院、2010年）に拠る。

(5)　「残雪伴寒梅」の詩句「紅蕊乍悛鶯失宿／素毛相似鶴同胎」に見られる「紅蕊」と「素毛」という色対は、道真の「早春侍二宴仁寿殿一、同賦二春雪映二早梅一応製」（『菅家文草』巻一・066）の頸聯「鶏舌纔因風力散／鶴毛独向夕陽寒」に見られる「鶏舌」と「鶴毛」という色対に相似している。また、「春風扇微和」の詩句「揺樹漸知花面目／過園偸勧薬君臣」は、『和漢朗詠集』（春・雨）所収の長谷雄詩「仙家春雨」の摘句「養得自為花父母／洗来寧弁薬君臣」に類似している。「仙家春雨」詩の作時は未詳で、どちらが先行する詩句なのかは分からないが、長谷雄が自作を焼き直しているように見受けられよう。

(6)　『新撰朗詠集』の引用及び通し番号は、和歌文学大系本『和漢朗詠集・新撰朗詠集』（佐藤道生・柳澤良一校注、明治書院、2011年）に拠る。

(7)　渡邊秀夫著『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、1991年）第332頁以降「紀長谷雄・略年譜」参照。

ており、灯火を残菊に喩えて解釈している。しかし、この詩句は一聯しか現存しないため、原詩が残菊に関係するものかどうか何とも判断しにくい。むろん、柳澤氏のように残菊にちなんで解釈をするのも一つの案である。だが、江総の「姫人怨」(『芸文類聚』巻三十二、人部十六)という詩の「寒灯作レ花羞二夜短一／霜雁多レ情恒結レ伴」のように、「寒灯」を特定の花と結び付けずに詠じた例を想起するならば、長谷雄の詩句の「寒灯」も、漠然と不特定の花と解釈するにとどめておく方が無難ではないか。その場合、この詩句の主旨は残菊とは関係なくなるが、『新撰朗詠集』の詩題表記である「九月尽」とは一致する。つまり、長谷雄が秋の最後の日の夜半には灯心を繰り返しかきたて明るくして、秋との別れを惜しんでいる、という意味になる。そうなると、「九月尽」というまさしく平安朝独特の惜秋文学の趣旨が鮮明に見えてくるのである。

このように、決定的な証拠が不十分なため、『新撰朗詠集』のこの詩句を延喜二年の公宴作と推定するにはまだ慎重を要すると筆者は考えている。もちろん、たとえそれが延喜二年の公宴作と推定しても、この一聯の詩句の解釈だけから、長谷雄の延喜年間以後の公宴での作詩態度そのものを解き明かすのは無理がある。

要するに、この詩句からも前述の四作の詩句からも、長谷雄の延喜以後の公宴での作詩態度を決定づけることは難しい。わずかに手掛かりとなるのは、この延喜二年の「九月尽日惜二残菊一応製詩序」だけなのである。この意味で、当該詩序は貴重な価値を持っているのである。

次節では、長谷雄の延喜以後の公宴での創作態度を検証しながら、当該詩序の内容の検討を行いたい。

二、「九月尽日惜残菊応製詩序」に見られる自作の再利用

当該詩序は、『本朝文粋』(巻十一・335)に全文が収められている。原文と書き下し文は次の通り。

秋之云暮、余輝易斜、	秋の云(ここ)に暮れぬ、余輝斜めなり易し、
菊之孤芳、残色可惜。	菊の孤芳、残色惜しむべし。
嗟乎、	嗟乎(ああ)、
潘郎寓直、雖緩愁悩之心、	潘郎の寓直、愁悩の心を緩(ゆる)くすと雖も、
陶令閑居、難堪凋落之思。	陶令の閑居、凋落の思ひに堪へ難し。
況復明王用心、	況んや復た明王 心を用ふれば、
自然合理。	自然(おのづから)理に合(かな)へり。
不出戸、而知一天下之思、	戸を出でずして、一天下の思ひを知り、
不下席、而明四海内之心。	席を下らずして、四海内の心を明らかにす。
故人皆送秋、所以賜送秋之宴、	故に人皆(みな)秋を送り、秋を送る宴を賜ふ所以(ゆゑん)なり、

人皆惜菊、所以降惜菊之恩。	人皆菊を惜み、菊を惜しむ恩を降す所以なり。
豈只天意乎、	豈(あに)只だ天の意のみならんや、
抑亦人望也。	抑(そも)そも亦(ま)た人の望みなり。
臣本陪蓬莱之宮、	臣本(もと)は蓬莱の宮に陪し、
今落塵土之境。	今は塵土の境に落ちたり。
古人餌菊花者、白日昇天。	古人の菊花を餌する者は、白日に天に昇る。
請試飡飽、	請ふ 試みに飡(くら)ひ飽きて、
将験先言云爾。謹序。	将(まさ)に先言を験せんと爾(しか)云ふ。謹みて序す。

この詩序は、対句(隔句対)を多用する精緻な駢儷文であるが、そこに創作意欲の衰退のようなものを示す表現はあるだろうか。仔細に検証すると、当該詩序には長谷雄が自作の表現を再利用した「焼き直し」とも言える部分が、主に二箇所ある。

(1)元慶七年の九月尽日の宴の自作との類似

一つめは、詩序冒頭の「秋之云暮、余輝易斜、菊之孤芳、残色可惜」という表現で、これは長谷雄自身が元慶七年(883)のある詩宴で作った「九月三十日白菊叢辺命レ飲詩序」の冒頭表現に類似している。詩序の題には「九月三十日」とあるから、当該詩宴も九月尽日の宴だと分かる。この序文も『本朝文粋』(巻十一・334)に収められている。全文は次の通り。

秋之云暮、唯菊独残。飲於叢辺、惜以賦之云爾。
秋の云に暮れぬ、唯だ菊のみ独り残れり。叢の辺に飲み、惜しみて以て之を賦す爾(しか)云ふ。

「秋之云暮」(傍線部)という劈頭のほか、九月の尽日に残菊を惜しむという主題も共通している。

見ての通り、短い十八文字だけの序文であり、そのやや特殊な制作事情については、同じく『本朝文粋』所収の菅原道真の同題の詩序(巻十一・333)に付けられた「各加二小序一、不レ過二五十字一」という注記で説明されている。普通、詩宴では詩序が一篇のみ作られる決まりだが、この詩宴では、道真と長谷雄とほかの詩人たちが、詩を作るほかに、各々五十字以内の詩序も作っていたのである。

まず留意しておくべきなのは、元慶七年(883)道真邸で行われたこの九月尽日の詩宴は、延喜二年(902)宮中の御殿で華やかに行われた公宴とは違い、菅家廊下の関係者しか参加していない私宴であったということだ。

道真の詩序は、以下の通り。

仲秋翫月之遊、避家忌以長廃。九月吹花之飲、就公宴而未遑。蓋白菊孤叢、金風半夜。今之三字、近取諸身而已云爾。

仲秋 月を翫ぶ遊び、家の忌を避けて以て長く廃せり。九月 花を吹く飲、公宴に就きて未だ遑(いとま)あらず。蓋(けだ)し白菊の孤叢にして、金風の半夜なり。今の三字、近く身に取りたるのみ爾(しか)云ふ。

菅家廊下の門下生との詩宴を重んじた道真は、この詩序ではおよそ次のようなことを述べている。菅家での詩宴の重要な場の一つである八月十五夜の詩宴が、父是善の忌月にあたるため停廃してしまった。また、重陽節のとき、自分は宮中の公宴に参加し、忙しかったため、自邸で詩宴を開催できなかった。やっと九月三十日の夜、この白菊のほとりで詩宴を開催できるようになった。

さて、道真の序文の最後の「今之三字、近取諸身而已」については、『本朝文粋』の本文だけ読んでも判然としないが、『菅家文草』を参照すれば事情が見えてくる。道真の当該詩序は『菅家文草』(巻二・126)[8]にも収められており、『菅家文草』の本文では、題の下の注記に「同勒二虚余魚一、各加二小序一、不レ過二五十字一」とあり、傍線を付したように作詩の韻字の規定も記されているのである。つまり、この詩宴では詩人たちはみな「虚」「余」「魚」という三つの韻字で詩を作らなければならないということである。現在、道真の詩作は『菅家文草』に伝存しているが、長谷雄の詩作は伝わらない。

この「今之三字、近取諸身而已」の解釈について、川口久雄氏は大系本の補注で「ここは、「虚しく余れる魚」というのは、ほかならぬこの自分の身のことをいうようだというのであろう。易経、繫辞伝に「近取諸身、遠取諸物」とある」と述べているが、筆者は賛同しかねる。

『易経』のこの文言は、中国古代の聖王の伏羲氏が周囲に観察できるもの(近くは自分の身体、遠くは天地日月などの自然万物)を象って八卦を発明したことを言っている。同様に考えると、道真の「今之三字、近取諸身而已」も、身近にあるものに基づいてこの三文字の韻字を決めたという意味になるだろう。

「魚」という韻字は、自邸の庭の池の魚などによって思いついたものと考えられる。しかし、「虚」と「余」を韻字にしたのは、いかなる身近な事情によるのだろうか。それは、道真の実際の詩作を通じて推測するしかない。ついでに道真の詩を通じて、詩宴の様子も窺うことができるから、その本文を掲げてみたい。

白菊生於我室虚　　白菊 我が室の虚(きよ)に生ず
残秋一夕又閑余　　残秋一夕 又た閑余(かんよ)なり
浅深淵酔花鰓下　　浅く深く淵酔す 花の鰓(あぎと)の下
取楽何求在藻魚　　楽しびを取るに 何ぞ藻に魚在ることを求めむや

前半二句は、秋の最後の夜に自邸の白菊のほとりでのんびりと宴を催すことを言っている。

(8) 『菅家文草』『菅家後集』の引用及び通し番号は、日本古典文学大系『菅家文草　菅家後集』(川口久雄校注、岩波書店、1966年)に拠る。以下、「大系本」と略す。

起句では、白菊が我が邸にのどかに咲いていることが説明されている。この部分が『荘子』(人間世篇)の「虚室生レ白」[9]を踏まえていること、この宴を純粋無垢で安心できる場と述べていることについては、波戸岡旭氏[10]が郭象注と成玄英疏を分析して明らかにしている通りだ。

おそらく道真が「虚」を韻字にしたのは、身近にある「白菊」の白さから「虚室生レ白」という典故を想起するという、現代人から見ればやや遠まわしだが、当時の知識人にとってはごく自然な連想に基づいた結果なのだろう。

さらに「余」が韻字に指定されたのは、承句から見れば二つの可能性が考えられよう。一つは、「残秋一夕」とある通り、秋が今宵一夜しか余っていないという事実に基づいた可能性。もう一つは、「閑余」(暇の意)に基づく可能性である。

転句について、大系本は「一句は、白菊の花のもとで、一同は、あるいは深酔いし、あるいは軽く浅くほろ酔いになって、魚があぎとうように、酔っぱらってしまったの意。「鰓」は「淵」の縁語」と注釈している。

結句については、大系本は「飲宴の楽しみを、昔は藻にある魚にたとえをとったが、別に魚に求めずとも、こよい淵酔の人人の姿をみよ」と解釈しているが、波戸岡旭氏[11]は「『詩経』小雅「魚藻」を典故とするが、君臣唱和の詩宴以外にも、このようにうちとけて楽しい自邸の宴もあるぞ、という意である」と解釈し、「在藻魚」が君臣唱和の詩宴を意味するものと捉えているように思われる。いずれにせよ、後半二句においては、「藻にある魚」と「白菊のもとに酔っている人」とを対比することによって、道真は自邸での私宴の楽しさが公宴と比べても遜色ないものだと誇示しているのである。

以上、「秋之云暮」という表現を持つ長谷雄の先行作品がつくられた背景を巡って検討してきた。続けて、もう一つの表現再利用の箇所を見てみたい。

(2)寛平元年晩秋の残菊の宴の自作との類似

前掲の延喜二年「九月尽日惜二残菊一応製詩序」の本文に戻る。筆者が二重傍線を付した箇所、つまり詩序の中間部分の「況復明王用心、自然合理。不出戸而知一天下之思、不下席而明四海内之心」という表現も、長谷雄自身が以前宮廷詩宴で作った詩序の表現を焼き直しているように思われる。

寛平元年(889)九月末頃(明確な日は未詳)、宇多天皇が主催する詩宴で、長谷雄は序者として「惜レ秋翫二残菊一各分二一字一　応製詩序」(『本朝文粋』巻十一・331)という作品を作った。これも残菊にちなんだ詩序である。全文は、以下の通り。

晩秋九月、夜漏三更、聖皇詔於侍臣、令各献詩。即賜題目、惜秋翫残菊。蓋賞時変也。当

(9) 「虚室生レ白」という典故については、『全訳漢辞海(第四版)』(三省堂、2016年)は「からの部屋には、日光がさして明るくなる。心をからにすれば、自然と物事の真実を悟ることができる。〈荘子・人間世〉」と解釈している。

(10) 波戸岡旭「重陽宴詩考」(同氏著『宮廷詩人 菅原道真 ――『菅家文草』・『菅家後集』の世界――』所収、笠間書院、2005年、第84～86頁。初出1992年)。

(11) 前掲波戸岡旭「重陽宴詩考」第86頁参照。

時侍者、皆相語曰、凡情之難堪者、莫過於秋天、感之至切者、莫深於歳暮。況復孤叢之将尽、寒花之纔残、豈止可惜於俗眼之下、亦知被翫於叡襟之中。所謂聖人者、不私其心、以百姓心為心、無常其思、以四海思為思者乎。如然者、何能使群下感秋之意、更過主上送夜之遊。遂以近叢而翫之、挑燭以看之。分膏腴於酔郷、割要害於楽地。臣之不敏、粗以敘之。謹序。

晩秋九月、夜漏三更、聖皇侍臣に詔して、各おの詩を献ぜしむ。即ち題目を賜ひ、「秋を惜しみ残菊を翫ぶ」と。蓋し時の変を賞するなり。当時侍する者、皆な相ひ語りて曰く、「凡そ情の堪へ難きは、秋天より過ぎたるはなく、感の至りて切なるは、歳暮より深きはなし。況んや復た孤叢の将に尽きんとして、寒花の纔かに残れるをや。豈に止だ俗眼の下に惜しむべけんや、亦た叡襟の中に翫ばるるを知る」と。所謂聖人は、其の心を私せず、百姓の心を以て心と為し、其の思ひを常にすることなく、四海の思ひを以て思ひと為す者か。然る如ければ、何ぞ能く群下秋に感ずる意をして、更に主上夜を送る遊びに過ぎしめんや。遂に以て叢に近づきて之れを翫び、燭を挑げて以て之れを看る。膏腴を酔郷に分ち、要害を楽地に割く。臣の不敏なる、粗以て之れを叙す。謹みて序す。

この寛平元年の詩宴の性格についてはすこし説明しておく必要がある。この詩宴は、元慶七年の道真邸での私宴のような性格を持たず、さりとて延喜二年の〈公宴〉のような性格でもない。先行研究によれば、宮廷詩宴は〈公宴〉と〈密宴〉の二種類に分けられ、〈公宴〉は内宴・重陽宴のような、儀式・政事の一環として天皇が詩文に興味を持つか否かを問わず催されるのに対し、〈密宴〉は内宴・重陽宴以外の詩宴のような、天皇の私的興味によって開かれるものである(12)。この寛平元年の詩宴は、まさしく宇多天皇の意志によって開催された〈密宴〉であり、宇多天皇の近臣だけ参加できた詩宴である。

さて、二重傍線を付した箇所のあたりでは、天皇がなぜこのような詩宴を開催するに至ったか、その根拠が述べられている。その「論理」について、藤原克己氏(13)の指摘を引用して説明したい。

天子が四季折々に侍臣に宴を賜うのは、天子が四海万民の心を自らの心としているからなのだ。たとえばゆく秋を惜しむ心は天下万民の切実な心情であり、天子は万民のそういう心を自分の心としているのだ。また侍臣がその宴で天子に詩を献ずるのは、そのような天下万民の四時の情を代弁するものなのだ。そういう論理を展開しています。

要するに、天皇は天下万民の心を汲み取って四季折々に詩宴を開かなければならないと

(12) 滝川幸司著『天皇と文壇』(和泉書院、2007年)の序論に詳しい。

(13) 藤原克己氏は、紀長谷雄の息子である紀淑望(きのよしもち)が執筆した『古今和歌集』の真名序と、長谷雄のこの「惜レ秋翫二残菊一各分二一字一　応製詩序」との関連性について述べながら、この詩宴開催の共通論理を指摘している。詳しくは、藤原克己・小川豊生・浅田徹「《共同討議》古今集序再考」(『文学』第6巻第3号「特集 古今集1100年」第6頁、岩波書店、2005年5・6月号)参照。

いう論理である。この詩宴開催の論理ないしは大義を確認した上で、次には延喜二年の詩序の表現が、いかにこの寛平元年の詩序のそれと類似しているかについて見てゆきたい。両序を並べて、二重傍線を付した箇所の類似度を分かりやすく示すと、次のようになる。

寛平元年の詩序	延喜二年の詩序
所謂聖人者	況復明王用心、自然合理
無常其思、以四海思為思	不出戸、而知一天下之思
不私其心、以百姓心為心	不下席、而明四海内之心

四角で囲んだ「思」「心」「四海」の表現は、延喜二年の詩序にそのまま踏襲されていることが分かる。さらに、波線部の「聖人」は、延喜二年の詩序では「明王」に置き換えられており、天皇を讃美する表現であることに変わりはない。

また、もう一つ波線を付した「百姓」は、延喜二年の詩序では「一天下」と置き換えられてはいるが、いずれも実は同質の内容を指しているようだ。後藤昭雄氏(14)が指摘しているように、長谷雄の寛平元年の詩序の「所謂聖人者、不私其心、以百姓心為心」という表現は、元稹の「才識兼茂明於用体策」の「対(こたえ)」(『元氏長慶集』巻二十八)に見られる「然後、陛下闢二四門一、使二可レ言之路通一。明二四目一、以二天下之目視一。達二四聡一、以二天下之耳聴一。不私二其心一、以二百姓心一為レ心」の措辞をそのまま借用しているからである。元稹の表現に照らし合わせれば、百姓とは即ち天下万民のことであり、「一天下」と「百姓」はその内実を同じくするものであると窺える。

ここに至って、寛平元年の詩序に展開された論理が十三年後の延喜二年の詩序にも流れ込んでいることが確認できた。だが、そうした論理の一貫性を事実として認めつつも、長谷雄のような大文人なら、もっと別の違う表現ができるはずなのに、なぜわざわざこのように類似度の高い表現を再利用しているのか。また、このような再利用、「焼き直し」は、長谷雄が「延喜以後詩序」で告白したような、公宴での作詩に対する消極的な態度によるものと理解してよいのか。

もし単なる創作意欲の衰退を理由とするものならば、長谷雄はなぜ、他ならぬ元慶七年と寛平元年のこの二つの詩序の表現を利用したのかという問題が残る。この問題を仔細に検討してゆくと、延喜二年の九月尽日の公宴において、長谷雄は消極的な作詩態度を取ったというより、むしろ苦心に苦心を重ねて当該詩序を作り上げているのではないかと思われてくる。これについては、次節で述べたい。

三、「九月尽日惜残菊応製詩序」に見られる紀長谷雄の苦心―菅原道真への私的追想―

長谷雄にとっての、道真という存在の重要性は言うまでもない。「延喜以後詩序」に語ら

(14) 後藤昭雄著『本朝文粋抄 五』(勉誠出版、2018)第163～164頁参照。

れているように、長谷雄が延喜年間以後、作詩を好まなくなったのは、詩友道真の不在に起因するものである。まして道真その人が九月尽日の宴の創始者であったことを鑑みれば、その左遷後に開催されたこの延喜二年(902)の九月尽日の〈公宴〉に参加するにあたり、長谷雄の胸の内が穏やかであったとは考えにくい。

先行研究[15]によれば、日本の九月尽日の宴の起源は、まさに道真が主催した元慶七年(883)の私宴にさかのぼる。その成立背景だが、道真が父是善の忌月にあたるため停廃していた菅家廊下の八月十五夜の詩宴に代わる新企画として、九月尽日の詩宴を創出したと北山円正氏は指摘しており、また道真創始のこの私宴が、寛平年間に宇多天皇主催の〈密宴〉になったりして、やがて延喜二年に醍醐天皇が主催する〈公宴〉に格上げされていった経緯も明らかにしている。

そのような事の成り行きを目の当たりにしてきた長谷雄は、感慨深いものを覚えたに違いない。つまり、九月尽日の宴は延喜二年九月二十八日に〈公宴〉として華やかに開催されるようになったが、その創始者の道真は奇しくも前年の昌泰四年正月(七月に「延喜」に改元)に大宰府に流されてしまっていたのである。

因みに、延喜二年九月二十九日、前日に宮中で既に九月尽日の公宴が催されていたのを知るべくもないまま、道真は大宰府の配所で「九月尽」(『菅家後集』512)という詩を詠じた。

今日二年九月尽	今日 二年の九月 尽きぬ
此身五十八迴秋	此の身 五十八迴の秋
思量何事中庭立	何事をか思量する 中庭に立ちたり
黄菊残花白髪頭	黄菊の残花 白髪の頭

平明で分かりやすい詩である。第三句の「思量何事」について、北山円正氏は「自ら始めた九月尽日の宴が、都でどうなっているかに思いを馳せることも含まれているのではないだろうか。都の様子は知るべくもなかっただろうが、この日の公宴に合わせたかのような詠である。宮廷での華やかな公宴と、大宰府における苦難の中の独詠を比べてみると、晴の場から隔絶された道真の没落が際だって来る」[16]と述べている。翌延喜三年(903)三月、道真は大宰府で逝去し、長谷雄がこの詩友と再び相見えることはなかった。

このように、長谷雄が道真主催の元慶七年の九月尽日の私宴で自ら作った序の冒頭表現(「秋之云暮」)を、そのまま道真不在の延喜二年の公宴で作った詩序にわざわざ流用している事実は、実に興味深い。そこには、師匠であり詩友であった道真を偲ぶだけでなく、九月尽日の宴の創始者としての道真の記憶を喚起するという意味合いも込められているに違いない。

では、寛平元年(889)の詩宴の自作表現の再利用については、どのように捉えるべきだろ

(15) 前掲太田郁子氏論文と北山円正氏論文参照。

(16) 前掲北山円正著『平安朝の歳時と文学』の第19頁参照。

うか。これについては、寛平元年当時の道真の所在から考えてみたい。実はこの時点の道真は讃岐守在任中(886-890年)で、都に不在だったのである。前述のように、寛平元年の詩宴は公事の一環としての〈公宴〉ではなく、宇多天皇の私的興味で催された〈密宴〉である。この〈密宴〉の献詩者は長谷雄を含めれば十六人になり、詩人と宇多天皇の蔵人・近親者と二つのグループに分けられる[17]。その詩人グループには、島田忠臣や大蔵善行などの大文人の名も見られたが、道真だけが不在であった。道真のその後の重用ぶりを鑑みれば、仮にもし寛平元年には道真が讃岐でなく都にいたなら、宇多天皇のこの〈密宴〉に招待されていたことは間違いないだろう。

因みに、道真はこの〈密宴〉には参加できなかったが、翌寛平二年(890)閏九月に宇多天皇が主催した九月尽日の〈密宴〉には参加して「閏九月尽、灯下即事応製」(『菅家文草』巻五・336。詩序は『本朝文粋』〔巻八・227〕の「時節」という分類の詩序にも所収)という詩序および詩を作っている。この時点で、道真は讃岐守の任を終え都に帰っていたのだ。ではなぜ長谷雄は、延喜二年の九月尽日の〈公宴〉で道真を追想するに当たり、寛平二年の九月尽日の〈密宴〉で詩友が残した詩序や詩の表現を用いていないのかと訝る向きもあるかもしれないが、事柄はそれほど単純ではない。

延喜二年といえば、道真左遷のまだ翌年なのである。この時点では、道真もその子たちも流罪者の立場であり、道真の嫡子の高視が赦免され、大学頭に復帰するのは延喜六年を俟たなければならない。それに、延喜二年のこの〈公宴〉には、道真の左遷を企てた張本人の藤原時平も出席している。そのような〈公宴〉において、道真の詩文の表現を用いて道真を追想していると知られたら、権力者の不興を買いかねない。ここに長谷雄が道真の表現ではなく、自作の表現を再利用した理由を求められるのではないか。元慶七年の私宴での自作表現の再利用が、九月尽日の宴の創始者である道真をさり気なく想起する役割を果すものだとすれば、寛平元年の〈密宴〉での自作表現の再利用は、あの時と同様にこの延喜二年の〈公宴〉にも道真不在であると仄めかす役割を果しているものと推測できよう。

このように延喜二年の当該詩序は、一見すると〈公宴〉詩序ではあるが、自作表現を独自のやり方で再利用することによって、詩友道真への私的追想を成し遂げているのである。極めて特殊で類稀な技法と言えよう。このような精緻な技法を有する当該詩序は、長谷雄の創作史のみならず、平安朝の漢文学史にとっても、特に公宴詩序の視点からみた場合、一種独特な存在感を放つものであることは間違いない。

ところで、このような技法で公宴作に私的追想を詠い込んでいた長谷雄の苦心を、誰か読み取った者はいるだろうか。ひとり挙げるなら、少なくとも『本朝文粋』を編纂した平安後期の大文人である藤原明衡(989～1066年)は、長谷雄の苦心を理解していたのではないだろうかと思われる。

『本朝文粋』巻十一は「草」と関わる一連の詩序が収められている。そのうち、晩秋(九月末頃)に残菊を愛でたり惜しんだりするのを主題とする詩序は、次の通り七首ある。

(17) 前掲滝川幸司著『天皇と文壇』第一編の第二章「宇多・醍醐天皇の文壇」参照。

① 菅原道真「惜残菊応製詩序」（『本朝文粋』巻十一・329）
② 紀長谷雄「賦対残菊待寒月詩序」(同330)
③ 紀長谷雄「惜秋翫残菊応製詩序」(同331)
④ 菅原道真「秋尽日翫菊応令詩序」(同332)
⑤ 菅原道真「九月三十日白菊叢辺命飲詩序」(同333)
⑥ 紀長谷雄「九月三十日白菊叢辺命飲詩序」(同334)
⑦ 紀長谷雄「九月尽日惜残菊応製詩序」(同335)

傍線を付した③⑤⑥⑦の四作は、本稿で取り上げ検討したものである。

③の詩序は、道真不在の寛平元年の〈密宴〉で長谷雄が作ったものである。そして、同じ「秋之云暮」という冒頭を持つ⑥と⑦の詩序がこのように緊密に配置されているのが、実に興味深い。藤原明衡のような大文人なら、『本朝文粋』を編む際に、おそらく道真や長谷雄らの作品を熟読し、その詩友関係に至るまで熟知していたに違いない。

この配列順序のおかげで、⑥の「秋之云暮、唯菊独残。飲㆓於叢辺㆒、惜以賦㆑之云㆑爾」と極めて短い詩序を読んだ直後に、視線を⑦の詩序へ移動すれば、それもまた「秋之云暮」という冒頭で始まっていることに、読者は否応なく気づかされるだろう。仮にこの二つの序が、それぞれ『本朝文粋』の違う巻に配置されていたら、両序の冒頭の類似度に気づくのは困難になるだろう。その意味で、この配列の緊密さは、前述した公宴作に私的追想を詠い込んだ長谷雄の苦心を理解していた藤原明衡が、あえて読者に与えた無言の暗示と理解することができるのではないだろうか。

まとめ

以上、紀長谷雄が延喜二年に作った「九月尽日惜㆓残菊㆒応製詩序」の成立背景を巡って再検討を行ってきた。当該詩宴が公宴で、その名誉ある序者を任された長谷雄は、あえて自作の表現を再利用して当該詩序を作っている。本稿の考察を通して、長谷雄が自作の表現を任意に使い回しているのではなく、極めて意図的に元慶七年と寛平元年の詩序表現を再利用していることが分かった。そのような詩的操作によって、九月尽日の宴を創始した詩友道真への私的追想を、延喜二年の公宴で、その場にいる参加者には気づかれないまま堂々と成し遂げている。このような大胆な技法は、長谷雄の創作史はもちろん、平安朝の公宴詩序の歴史においても極めて特殊で類稀な試みと言えよう。

廖栄発（りょう えいはつ、LIAO Rongfa）
中国厦門大学日本語教育研究センター

付記

本稿は、中国福建省社会科学基金青年項目「中国文学対日本平安朝漢詩功用演変的影響研究」(項目批准号:FJ2021C047)による研究成果の一部である。

参考文献

大曽根章介・金原理・後藤昭雄校『本朝文粋』、岩波書店、1992年
太田郁子「『和漢朗詠集』の「三月尽」「九月尽」」、『言語と文芸』第91号、1981年3月
川口久雄校注『菅家文草　菅家後集』、岩波書店、1966年
北山円正著『平安朝の歳時と文学』、和泉書院、2018年
後藤昭雄著『本朝文粋抄 五』、勉誠出版、2018
佐藤道生・柳澤良一校注『和漢朗詠集・新撰朗詠集』(和歌文学大系本)明治書院、2011年
周防朋子「平安朝文学にみられる「九月尽」詩について」、『甲南大学紀要 文学編』第138号、2004年
滝川幸司著『天皇と文壇』、和泉書院、2007年
波戸岡旭著『宮廷詩人 菅原道真 ——『菅家文草』・『菅家後集』の世界——』、笠間書院、2005年
藤原克己・小川豊生・浅田徹「《共同討議》古今集序再考」、『文学』第6巻第3号、「特集 古今集1100年」第6頁、岩波書店、2005年5・6月号
本間洋一著『類聚句題抄全注釈』、和泉書院、2010年
廖栄発「長谷雄の「詩言志」の宣言 ——「延喜以後詩序」を読み直す——」、『和漢比較文学』第56号、2016年2月
渡邊秀夫著『平安朝文学と漢文世界』、勉誠社、1991年
——『漢語大詞典』、上海辞書出版社、1986-1994年
——『全唐詩』、中華書局、1960年
——『全訳漢辞海(第四版)』、三省堂、2016年
——『日本国語大辞典(第二版)』、小学館、2000-2002年